

睡蓮

S U I R E N

愛知大学
教育研究支援財団
広報誌

11

2024 / 4



巻頭特集[知の対話]

三位一体となり、未来を切り開く。

愛知大学理事長兼学長

愛知大学同窓会会長

愛知大学後援会会長

当財団理事長

広瀬 裕樹 × 八木 好郎 × 武山 卓史 × 加藤 満憲

Professional Eye

運命と向き合い
日中を見つめてきた半生

公益財団法人 東京財団政策研究所
主席研究員

柯 隆



知で 活きる人へ。

公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION

Contents

【知の対話】

三位一体となり、未来を切り開く。

愛知大学理事長兼学長

広瀬 裕樹

愛知大学同窓会会長

八木 好郎



愛知大学後援会会長

武山 卓史

当財団理事長

加藤 満憲

P.03

【Professional Eye】

運命と向き合い

日中を見つめてきた半生

公益財団法人 東京財団政策研究所

主席研究員

柯 隆

P.09

【AERSの一年】

【教育活動の支援】

「ハーバード大学アジアセンター所長
ジェームス・ロブソン教授をお迎えして」等

P.12

「奨学金・奨励賞授与式」等

P.15

【寄附者名簿】

P.19

「睡蓮」について（題字「睡蓮」平松 礼二氏 筆）

愛知大学の教育思想は、国際社会や地域社会のリーダーとなり、世界をダイナミックに動かす人材を育てること。睡蓮の花言葉には、そのような人材に必要な「清純な心」「純粋」「優しさ」「信頼」の意味が含まれており、彼らの未来を支える愛知大学教育研究支援財団の情報発信誌を「睡蓮」と名付けました。



ごあいさつ

日頃は、「公益財団法人 愛知大学教育研究支援財団」の活動に格別のご理解とご支援を賜り、厚くお礼を申し上げます。

当財団は、昭和40年、同窓会の一機関として（同窓会が行ってきた母校愛知大学への援助体制の恒久化実現のため）設立された「財団法人 愛知大学同友会」を前身とし、平成24年11月、後援会の参画も得た「公益財団法人 愛知大学教育研究支援財団」として再出発いたしました。

当財団といたしましては、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実並びに不特定多数の者の利益の増進に寄与することを目的として、公益財団法人としての使命を果たすべく公益目的事業の安定的な実施に努めているところでございます。

こうした中、当財団が、学術研究助成、課外活動支援、奨学金制度、キャリア形成支援を始めとする諸事業を積極的に推進することができておりますのも、この趣旨にご理解とご賛同をいただいております愛知大学、同窓会、後援会をはじめ、広く一般企業や個人の方々のご厚情の賜物でございます。

ここに、賛助会員様をはじめとする皆様に、2023年度の事業実施概況等のご報告を兼ねまして、機関誌「睡蓮第11号」を送付させていただきます。是非ともご覧いただき、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

公益財団法人
愛知大学教育研究支援財団
理事長

加藤 満憲



評議員・理事名簿（2024年4月現在）

評議員	地主 道夫	理事	加藤 満憲（理事長）
	近藤 薫		林 昇平（常務理事）
	石川 健次		長谷川 信義
	西原 健二		古川 為之
	土井 義昭		那須 真理子
	岸田 充広		柘植 繁久
	杉本 みさ紀		八木 好郎
	金田 学		武山 卓史
	坂野 嘉昭		平井 治彦
	佐々木 康司		唐 啓山
	砂山 幸雄		加納 寛
	吉垣 実		鈴木 正也
	古川 千歳		功刀 由紀子
監事			小出 恭己
			南 成

表紙のご紹介

平松 礼二氏 作 「春の風・モネの池」部分（2011年）

空と水面が重なり合う深い青色に引き込まれると、春の風の中を舞う鳥となって心までが自由に大空を舞うかのような時間が訪れ、平松芸術の神秘の力に驚かされる。



巻 頭 特 集

知の対話

愛知大学同窓会会長
八木 好郎
YAGI Yoshiro

愛知大学理事長兼学長
広瀬 裕樹
HIROSE Yuki

当財団理事長
加藤 満憲
KATO Mitsunori

愛知大学後援会会長
武山 卓史
TAKEYAMA Takushi

三位一体となり、未来を切り開く。

昨年11月、広瀬裕樹法学部教授が愛知大学理事長兼新学長に就任しました。今回の知の対話では、新学長、同窓会会長、後援会会長、当財団理事長の4名が出席し、愛知大学の魅力とは何か、取り巻く課題は何か、その課題解決のために何が必要か、などについて、踏み込んだ意見を交わしました。このように一堂に会することはこれまでなく、とても貴重な機会となりました。それぞれの立場から導かれた、愛知大学がこれからのために取り組むべきことをお伝えします。

“面白い”と“チャレンジ”が 未来への鍵を握っている

－ まずは学長就任にあたっての抱負や思いについて聞かせてください。

広瀬／大学は未来がないといけなくはないと思っています。未来を発信していく場所じゃなきゃいけないですし、学生たちの未来を預かっている場所でもあります。また、学生にとってみると、大学を通して自分の未来を切り開いていく場所でもあります。いろいろな側面から「未来」はかなり大きなキーワードではないでしょうか。では未来に向けて具体的にどうするのかというと、みんなに面白いと感じてもらいたいと考えています。それは学生も教員もということです。それをいかに解き放つことができるかっていうのが、以前から自分のテーマでして、そのためには学生も教員もいろんなことにチャレンジできる風土を作ったり、あるいは制度を作って促したりしながら、それぞれが面白いことを追い求めていってもらうということです。未来というのは狙ってできるものではないと思うんです。自分なりに面白いと思うのを追求していくと、抑え込む力みたいなものを解き放つことができ、心を開放するような形で面白いものを各自が求めていけば、それが大きな波になって、未来が徐々に見えてくると思うんです。私は、大学の各教員が研究を自由にやることで、その後から未来がついてくるみたいなイメージを持っているので、そういう環境作りができるかということを私が今考えていて大事にしているということです。

愛知大学理事長兼学長 広瀬 裕樹氏

1971年、岐阜県生まれ。名古屋大学法学部卒業後、名古屋大学大学院法学研究科に進学し、2002年に愛知大学法学部に奉職。法学部長、学長補佐などを経て、2023年11月15日、愛知大学学長・理事長に就任。専門分野は、奇しくも創立者の本間喜一先生がお得意とされた商法。本間先生もご担当された「手形法」などの科目で教鞭を取ってきた。法学部主催の模擬裁判企画も長年にわたり担当。ゼミに所属した学生は、累計で500名を超える。

八木／私は卒業して52年経ちますが、私がいる頃の愛大というのは、非常にチャレンジ精神が強く、何事にも果敢に挑戦する姿があったと思います。私はサラリーマンを47年やってきましたが、時代の流れかもしれませんが、そういう部分がちょっと欠けてきている気がします。私は「愛大魂」と言ってますが、もう一度何事にもチャレンジする、失敗を恐れない、失敗したらごめんなさいというような、謙虚な学生を増やしていったほうがいいなと感じています。そして社会に出て通用する、地域でも頑張る同窓生、そういう人たちを私も同窓会としても応援していきたいと思っています。

愛大を誇りに思うOBの多さをもっとアピールしていきたい。

武山／後援会是在学生の保護者が会員であり、その保護者と大学の連絡を密にして、学生のため、大学の教育向上や学生の福祉増進のために活動しています。私は後援会長であり、在学生の父親でもあるのですが、実は八木会長と同じく同窓生なんですね。しかも僕は父親が愛知大学の車道校舎に、私自身はもう今はない三好校舎に通い、私の息子が名古屋校舎にお世話になっています。

後援会長としてまず初めに学生たちを見るのが、卒業式です。先ほど学長が言われた未来ということ言えば、卒業式のときの学生の顔は、まさに愛知大学という世界から、社会や未来に羽ばたく希望と不安に満ちた顔をしています。そしてその後

に学生を見るのが入学式です。入学式での学生は、もう真っ白ですね。真っ白いキャンパスをこの4年間で彼らはどういう色を加えて、デッサンを変えて色を加えていくのかなと想像します。そして多くの学生は未完成のまま卒業していきます。卒業時に自分の未来をはっきりと描いている学生は本当にひと握りです。それ故、4年間は、非常に自由でありながら、人生を決める本当に大事な時間だと思います。このため後援会にも、いろいろな支援をするという非常に大きな責任があると感じています。

同窓会の方にお会いして印象深かったことは、愛知大学出身を誇りに思っている同窓生が本当に多いことです。普通は、大学卒業をしたら大学のことはもう忘れてしまうというか、同窓会報が来ても目を通すこともなかなかないという感じなのかなと思います。しかしこうして愛知大学に関わるようになると、他の大学と比べてこの地元に胸を張って仕事をしている方が多く、それをもっとアピールしていかなければいけないと強く感じますね。

チャレンジしている学生が意外に多いことが知られていないのは課題。

－ 卒業式や入学式を見てこられて、最近の若い子たちへの印象はいかがですか？

武山／真面目ですね。最近は公務員を目指す学生が多いと聞きますし、大学に入ってからそのための勉強している学生が増えているということもあるかもしれませんが、目的を持って自分で勉強している子が本当に多い。それが真面目という印象から、おとなしいと捉えられるのかもしれませんが、それはそれで本当にすばらしいことだと思います。

広瀬／本当にそう思います。武山会長がおっしゃったように、真面目なのでとすると小さくまとまってしまうんですね。でも、せっかくの4年間もったいないなとも思っています。

最近考えているのが、どれだけ大学がチャレンジできる環境に持っていけるかということなのですが、実は思っていたより学生はチャレンジもしているんですね。チャレンジしている学生は、たくさん真面目にチャレンジしていて、勉強とチャレン



ジをちゃんと両立させている。ただ大きな課題としては、それが単発になってしまっているところがあり、みんなが頑張っていることを愛知大学全体に知ってもらえるようになると、もっと活気が出るだろうと思いますので、そういう発信の重要性を強く感じています。

加藤／学長のおっしゃった「未来」という言葉は、非常にキーワードとして大事なことだと思います。そのために4年間の大学生活でいかに勉強や充実した活動をして各々が未来に繋げていくかということだと思いますが、大学を通していろんなチャレンジをするためには、そういう場所や機会、チャンスというものを、一部の学生だけではなく、例えば学園祭のような、みんながひとつの気持ちになって、みんなが燃えて、団結していくような形になれば、大学生活ももっと楽しくなってくるし、人間関係も良くなってくるだろうと思います。また、そのような経験を通じて母校に対する誇りが醸成され、それが母校愛に繋がり、同窓会の活動などにも良い影響を与えていると思っています。

八木／そのためには、卒業してから同窓生同士が横の絆を作ることが大事じゃないかなと思いますね。それによって卒業後も、母校に対して何かをしていきたいという気持ちが生まれるんじゃないでしょうか。同窓会の目的としては、親睦を図ると同時に、大学の発展に寄与することなので、卒業生や同窓生の横の連携や絆を深めれば、もっと大学に対して貢献できるんじゃないかと思います。そして同窓会のバックアップが大学をさらに盛り上げていくと思いますが、そのためには現在の愛知大学をもっと知る必要があると感じています。

広瀬／それは大学の課題でもあり、もっとお届けしないとイケないですね。

八木／たとえば学園祭に同窓生がもう一度行ってみようと思ってもらうために、何か仕組みができないかなと思いますね。そのために大学と同窓会が連携すればもっといい仕事ができるんじゃないでしょうか。

武山／奨学金の授与式に後援会長として出席した際に、おとなしいと思っていた愛大の学生の中でも、さまざまな活動をしている学生がいることを知って本当



当財団理事長 加藤 満憲氏

愛知県生まれ。1969年愛知大学法経学部経済学科卒業後、東海テレビ事業株式会社入社。1988年日本音楽出版株式会社設立。2013年同窓会会長代行。当財団理事長就任。愛知大学応援団OB会名誉会長。愛知大学応援団後援会長として、母校と応援団の隆盛発展に注力中。

に驚きました。今は特にSNSがありますから、それぞれ自分で発信していると思います。そういう事実を授与式で初めて知るのではなく、やはりリアルタイムで保護者や学生に、こういう学生がいることを大学がアピールしていかなければいけないのかなと思います。



広瀬／発信ということについて全国の大学でもそれが完璧にできているところは、あまりありませんが、次の世代を視野に入れた時、それは大きな課題だと思っています。大学に来て隣の子が頑張ってるんだったら、自分もできると思えるんですね。それが環境なんです。隣の子が普通の子だと思っていたら、こんなすごいことやってるとか、隣にどうい子がいるかってすごく大事なことで、それを何かもっと共有できるようにしたいですね。特に大学の枠をはみ出て個人で頑張ってる学生が愛大とは言わずに活動している場合もあり、でもそういうケースでも大学がアピールしてあげるとそれはすごくいいんじゃないかな。そういう学生はいっぱいいます。例えば取材をすると、そういう学生も愛大生であることをしっかり自覚していますし、大学としてもっと共有できるシステ

ムができればいいなと考えています。

武山／そうするとそれが後援会の会員である保護者の耳にも入ると安心するんですね。子供が頑張っている姿を大学の方からも発信してもらえるとありがたいですね。

一生懸命勉強している姿を 実は一番見てもらいたい。

広瀬／実は保護者の方に一番伝えたいのが、我々の肌感覚なんですけど、学生たちは本当に一生懸命授業を受けているということです。普段校舎で頑張っている姿を保護者の皆様に見てほしいと思うぐらいですし、いつも授業をやりながら、私自身結構感動するほどです。本当に真剣に食らいついて授業を受けていて、300人や400人の教室でも授業の秩序が保たれていて、みんな真面目に聞いているというのは、やはり一定レベル以上の大学じゃないと起きない現象で、それが愛大では普通の光景なんです。それこそが環境だと思うんです。それが愛知大学のある意味一番の売りであり、愛知大学で一番大事なところなんです。ただ難しいのは、保護者の方に一番見せたい愛知大学の一番大事なところが、実は一番見せにくいんですね。

－大学では授業参観もありませんね。

武山／後援会の中でも、学校内のツアーをやってほしいとリクエストがあります。

広瀬／そこはやはり愛知大学が一番大事なところだなと思ってますので、これからどうやって発信していくかを考えています。

80周年は未来に繋げるために 抜本的に変えてもいい。

－ 2026年に迎える80周年に向けての考えや抱負をお聞かせください。

広瀬／まずアイデアを出すということは今考えてるところです。自分の中では、単に普通の式典をやって終わるというようなことにはしたくないなと思っていて、形に残るのか、あるいは何か新しい行事を始めるとか、型通りではない何か身になるもの、未来に繋がるもの・繋がることをしたいですね。例えばですが卒業式や入学式も、もう抜本的に変えてもいいかなとか、80周年を機にいろんなことをゼロベースで考えていいかなと思っています。まずアイデアを出して、1年ぐらいである程度形にしていくために準備しています。

加藤／ささしまの名古屋キャンパスが2012年にできたとき、地域や世の中に広くPRするために、学園祭と同じタイミングで60周年の同窓会も開催されました。準備委員会で学生と同窓生が共同で準備を進め、とてもたくさんの人が来場しました。学生と卒業生とが一緒に何かをやる機会はなかなかないですが、こういうことはすごく大事ですし、やってよかったと感じています。もしかすると学生も望んでるんじゃないでしょうか。

八木／今卒業生が約16万人、現在同窓生というのは10万5000人です。この人たち全員に発信しようと思うとなかなか難し

いところがあります。また、今まで通りの同窓会をそのまま継承していけばいいのかどうか、そうすると参加される方も変わらないという問題もあります。つまり新たな同窓会にしていくことは非常に大きな課題となっています。現状を打破するというわけではありませんが、加藤理事長にも相談して、今回「愛大ビジネスクラブ」を立ち上げました。同窓生同士の絆が新たに生まれ深まっていくような場を提供することで、同窓生の新たな参加の可能性も高まると考えます。時間はかかりますけれど、少しずつ体制を変えていきたいと思っています。

－ 同窓会と後援会と財団、それから大学との連携が今後非常に大切になってきそうですね。

加藤／財団では、大学と同窓会と後援会のご支援をいただいて、学生への奨学金の給付や教育活動助成など、学生へのバックアップという側面から資金助成をおこなっていますが、この三位一体（大学と同窓会と後援会）というのはとても大事なことでと改めて強く感じています。というのは、オーナーがいないみんなで作ってきた愛知大学だからこそ、この三位一体でしっかりとスクラムを組んでやっていかないと、これからの大学間競争で勝てないと思うんです。

武山／後援会では、東海地方だけではなく中部北陸、関東、九州など全国から役員の方が集まる会議が年に3回あります。

やはり思うのは、愛知県にいと愛大の知名度はすごく高いと感じますが、全国にはまだまだ広がっていないということを実感します。同窓会の中でも全国で活躍している方は多いと思いますし、80周年に向けてそういうことをもっとアピールしていくことが本当に大事なのかなと思います。



選ばれる大学であるために 重要なのは発信力。

八木／私がいつも言ってるのは、特にこれから人口が減る時代に愛大が選ばれるにはどうすればいいのか、選ばれる大学となるためにどうしたらいいかってことをもっともっと研究していく必要があるのかなと思います。

広瀬／その発信が今までの課題です。そこをとにかく解決したいんですよね。中部地区だけじゃなくて、日本中に発信していくと、もっと反応してくれるそうですし、学生も増えてくるかなと思っています。

－ 他の大学との差別化や独自性どう発信していくか。

八木／いろいろなSNSを見てますけれど、やっぱり学生が個人で発信している。それをもっとうまくみんなに発信できるようにするべきですね。

広瀬／おっしゃる通りです。ちょっと調べてみただけですけど、愛大にも学生の活動がすごくたくさんあるんですよ。例えば今話題になっている国際協力団体SEED（シード）というボランティアサークルは、学生たちにより自然発生したサークルです。それが三好キャンパスの頃から10数年やっていて、その成果が認められて24時間テレビでコラボしているんですね。そういうのが実はたくさんあるんです。でもそれが学生たちの中でも

愛知大学同窓会会長 八木 好郎氏

1950年、岐阜県生まれ。1972年愛知大学法経学部（豊橋校舎）を卒業、出身地の岐阜県に本部がある岐阜信用金庫に就職、43年間勤務、副理事長を最後に退任。2016年（株）パークコンサルティングを設立、コンサルティング業務に取り組む。2022年6月、愛知大学同窓会第17代の会長に就任。



よくわかってないし、保護者の方は全然知らない。なのでやっぱり伝えなきゃいけないし、もっと世の中に発信できることがたくさんあると感じています。

チャレンジしている学生と 大学との関係を もう一度見直していく。

武山／秋におこなわれた保護者懇談会では、今までは著名人を呼んで講演会をやってきましたが、ちょっと趣向を変えて、学生を主役にしてみました。学長が言われたボランティアサークルをはじめ、さまざまな活動をしている学生たちに壇上に上がってもらい、喋ってもらいました。家庭ではなかなかそういう話は聞けないですし、僕の中ではすごくやってよかったなと思っています。とても立派なことを喋っていて、大学の4年間でもうインプットは十分にしてるんですね。本当に感動するほどの体験でした。

広瀬／なるほど、そういう学生たちがものすごい発信力があるということですね。そういう学生は本当にたくさんいるんです。意外とテストはできなかつたりする普通の学生で、でも講演してもらって立派な学生なんですね。しかももっとはみ出ている学生もいます。ただその学生たちはおそらく、こういうことが大学に知れたらどうなるのかと思っているかもしれませんけども、大学がそこで肯定して支援やアピールをしてあげれば、彼らも心強いでしょうし大事なことですよね。学長という立場になって感じるのは、学部長だと他の学部のものすごい学生や、同じ校舎のすごく面白いことやっている学生たちの情報が全然共有できてなかったということです。それはとてももったいないなと思っています。今思っているのは新しいことをやるよりも、もう既にそういう素材があるので、それを正面から認めてあげて発信していく。みんなこんなにやっているからもういくらでもやっていいんだと思える環境を作っていくことが大事なんだと思っています。

八木／大学が学生たちを正面から認めてあげるのは非常に大事ですし、学生にとってもそれは心強いですね。そういう点では同窓会の各支部の総会などにも活動している学生に来てもらって、何かそこで発表



愛知大学後援会会長 武山 卓史氏

1993年3月南山大学法学部法学科卒業。1997年3月愛知大学大学院経営学研究科修士課程終了。大学在学中からFM愛知でラジオDJを務め、FM三重では毎週日曜日に3時間の生放送を5年間担当。1999年5月武山卓史税理士事務所所長。現在まで20年以上、税理士として租税教室（小・中・高校、大学生、社会人を対象）の講師を務めている。2019年3月まで桐山女学園大学現代マネジメント学部非常勤講師。2023年3月まで南山大学非常勤講師。2021年6月、愛知大学後援会の会長に就任。

してもらおうと、学生と同窓会各支部との接点も生まれて繋がっていくと思いますね。

発信力を高めていくために 大学にできることが まだまだたくさんある。

武山／学生に来てもらって話を聞くというのは、愛知大学の今を知っていただくのに一番いいかもしれませんね。

広瀬／学生たちも喜んで行きますので、例えば学生たちのリストを作って、いろいろな形で使った方がいいですよ。

八木／そうですね。そこを繋いでいくのは大事ですね。やっぱり繋がらないと。繋ぐところがないと繋がらないですよ。大学がそういうところをうまく対応してもらえるといいと思います。

加藤／発信力がまだまだない気がします。一方で学生たちはすごいことをやって、愛大を知ってもらおうという点ですごく貢献していると思うんです。だからこそもっと発信してあげたい、多くの人に知ってもらいたい、そう強く思います。80周年では、ボランティア活動をしている学生にコンベンションホールに一堂に集まってもらおうのも僕はいいと思います。

広瀬／そうですね。

八木／やはり発信に関しては学生の方が上ですよ。情報という意味では彼らの方

がずいぶん進んでいるので、いかにそこに乗れるかってことだと思いますね。

学生や保護者のために 連携の絆をさらに深めていく。

広瀬／財団にはもうお世話になってばかりで、学生たちがチャレンジするときに手を添えてくださる財政支援はすごく大きいものですから、それは本当にありがたいですね。今後はさらに大学としてこういうご支援をいただくとありがたいというようなご相談を緊密に連携しながら、学生にとってより直接的で効果的な支援に繋がっていききたいと思います。

武山／後援会として保護者の方といろいろ話して思うのが、お子さんの中にはあまり話をしながらいない子もいますので、子供が大学で何をやっているかわからないという声も多いんですね。このような課題に 대응していくためには、成績だけではなく、大学のさまざまな情報提供を後援会が橋渡しとなって伝えていかなきゃいけないです。3年生になると、保護者の興味は子供の進路になりますが、同窓会には地元を中心に公務員でも企業でもOBがたくさんいるのでそういう情報を提供していくこともできると思うんですね。大学における情報提供と将来にむけての情報提供、これはもう僕らも力を合わせて、三位一体じゃないですが、それぞれが連携をとっていけばもっと安心して子供を大学に通わせることの後ろ立てをしていくことができるのではと思います。在学中のことは大学や財団との連携、大学を出てか

らのことは同窓会との連携。それぞれの連携の絆をさらに深めていくことが今後重要になってくると思います。

広瀬／本当にその通りです。

八木／Ai-CONNEX (アイ コネクス)※がようやくこの1年ぐらいで動きが出てきて、就職希望の在学生と卒業生との接点を持つ形ができたので、今後さらに連携をしていくことは必要なと思います。

取り巻く課題解決のために 情報発信をさらに強化していく。

加藤／財団として今一番危惧しているのは、少子化の影響によるご援助いただいている今後の寄付金の問題です。その確保のためにどうしたらいいかと考えると、卒業生や保護者に愛大の学生たちがこんなに頑張っているとか、同窓生でこんな優秀な人がいるとか、もっと発信していくことだと思います。裏を返すと、今はやっぱり情報発信不足なんじゃないかなと思いますね。

武山／入学して時間が経つと、保護者も大学への意識が薄らいでいくので、やっぱりコンスタントに情報を発信していくことは重要じゃないでしょうか。

加藤／たくさんの学生が頑張ってるんですけど、発信がうまくできてないことが課題としたら、共通の何かプラットフォーム

のようなものがあれば、大学も同窓会もホームページを活用して発信できるのでと思います。

八木／加藤理事長がおっしゃられたように、やはり少子化については本当に真剣に考えていかないと、突然ある時にバタッと来るわけではなく、気がついたときには遅いということになるので、今でもそうなのかもしれませんが、どういう手を打っていくかを、とにかく考えていくべきだと思います。より多くの同窓生の関心を高めていくために、今の情報をこまめに発信しつつけていく。関心を持って満足していただくことで応援したい気持ちや、寄付をしようかということになるわけです。繰り返しになりますが、これは同窓会だけではできませんし、財団のみでも無理ですし、後援会と大学もひとつになって向き合っていく問題だと思います。

愛大の歴史を知ることが 未来へ発信する力になる。

加藤／愛知大学は東亜同文書院という大学からできたわけですけど、その過程や創設当時の学生と大学のあり方がすごく素晴らしいんですね。そういうすごい歴史ある大学でありながら、今の学生たちにはあまり知られてない、知らせる機会がないとも言えます。それを知ってもらえば、いい大学に入ったという自信や誇りを持って、もっともっとやりがいや生きがいを感じられると思います。そうすれば、自分た

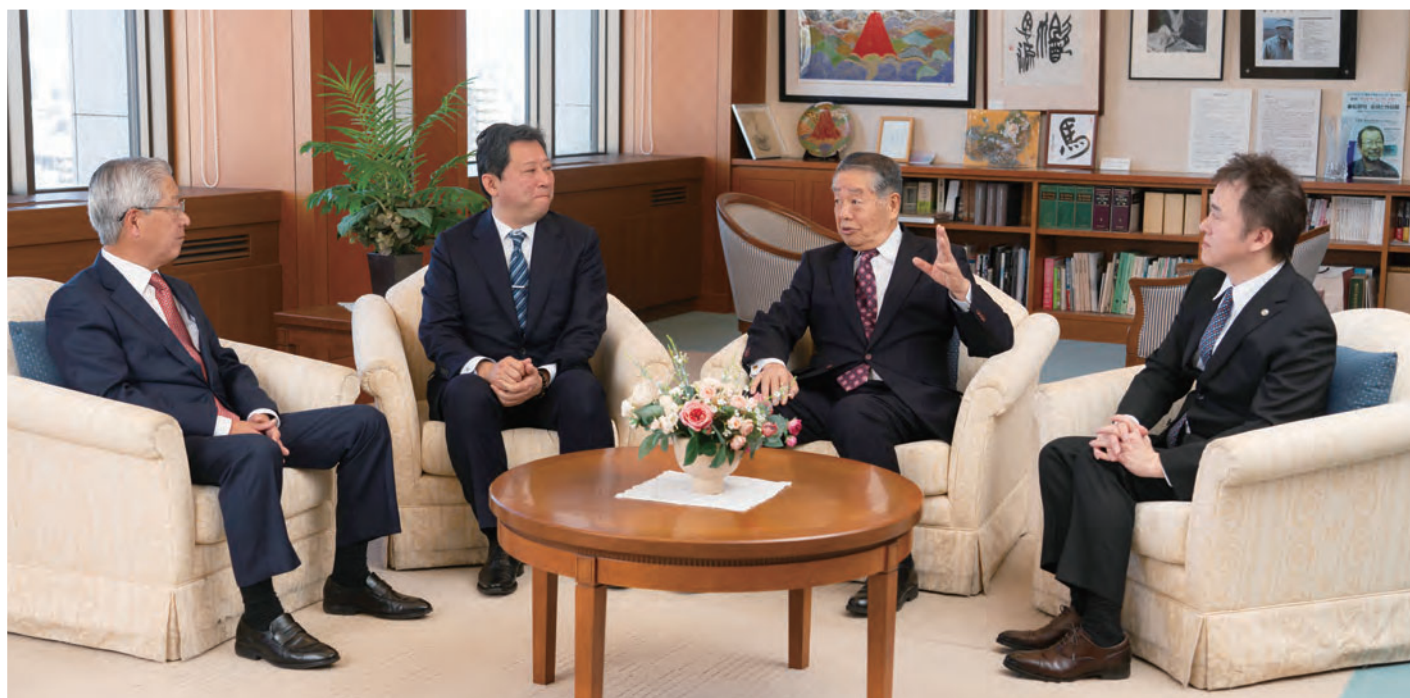
ちがこれからの愛知大学の次の時代を作っていくんだというような気持ちにもつながっていくと思っています。そういう発信もこれからしていけるといいですね。

三位一体となって 繋がっていくことが重要。

広瀬／後援会の保護者の皆様のご支援や信頼がないと、学生たちもやっぱり信頼して大学に来てくれないという思いがあります。その信頼を得られるように、大学が発信し、ご意見をまた伺うというやりとりを積み重ねていくことだと思います。そして学生たちが未来を見ていく上で、やっぱり同窓会のフォローがすごく大事だと思うんですね。この連携はとても大事です。同窓会という形ではありませんが、学生たちが就職活動の説明で、先輩たちの話を聞く機会をかなり大々的に設けていますが、先輩たちはもう喜んで来てくれるわけです。就活のお手伝いで、時間を惜しまず来てくれるんですね。一般企業でも公務員でも喜んで来てくれて、そういう意味で広く考えると生の同窓会活動を通して、先輩が後輩を見守ってくれている。今後はもっとうまくそれを整理して発信し三位一体に繋げていきたいと思いますね。

ー 今日貴重な機会をありがとうございました。

四人：ありがとうございました。





Professional Eye

運命と向き合い 日中を見つめてきた半生

featuring

公益財団法人 東京財団政策研究所
主席研究員

柯 隆

かりゅう Long Ke

1963年、中華人民共和国・江蘇省南京市生まれ。1988年来日、愛知大学法経学部入学。1992年、同大卒業。1994年、名古屋大学大学院修士課程修了（経済学修士号取得）。1994～1998年、長銀総合研究所国際調査部研究員。1998～2018年3月、富士通総研経済研究所主任研究員。06年より同主席研究員。2012年1月～静岡県立大学グローバル地域センター特任教授2018年4月～東京財団政策研究所主席研究員、株式会社富士通総研経済研究所客員研究員。

〈研究分野・主な関心領域〉・開発経済・中国のマクロ経済

愛知大学法経学部出身の柯隆氏は、中国問題について多くの著書を出版し、様々なメディアで発信をし続けているエコノミスト。今回は、愛知大学へ留学するまでの中国での暮らしや、愛知大学に入学してからの日本での暮らし、そして愛知大学への思いなどを聞いた。

運命が夢を閉ざし
運命が夢を開く

柯隆氏の仕事は、エコノミストである。30年間いくつかのシンクタンクに勤めてきた。最初に入ったのが、日本長期信用銀行の長銀総合研究所。次に、富士通総研経済研究所に転職し、そこでは20年間自由に、そして工夫と苦勞をしながら一生懸命研究

を続けた。そして5年前に東京財団へ転職し、現在に至っている。

「東京財団というシンクタンクは政府や財界への政策提言を目的としています。私はエコノミストとして中国経済や日中関係の研究をおこない、それに関していろいろな論文やレポートを書き、政策立案者に意見を提供しています」。

それでは、柯隆氏の半生を遡ってみたい。生まれ育ったのは、中国の江蘇省南京市。

元々は、日本語ではなく英語に興味を強く持っていたが、その思いは当時の中国政府のある政策によって閉ざされてしまう。

きっかけは、1983年に日中間で動き始めた大きな出来事に始ま



当初の計画では、夏に名古屋に着いて秋に受験、翌年4月から入学と考えていたが、実際名古屋に着いたのが翌年1月となってしまう、ほとんどの大学の募集が既に終わってしまっていた。「毎日、必ず新聞を読むことを日課にしていました。そしてある日、愛知大学で第2次募集が始まるという広告を目にすることになり、これを受けてみようと思いました」。合格した愛知大学では、経済学を勉強したかったが、受講できるのはマルクス経済学だった。資本主義の日本に来て、なぜマルクスを勉強しなければいけないのかと不思議に感じたことも、今では懐

かしい思い出である。当時日本の総理大臣中曽根康弘と中国の胡耀邦総書記は仲が良く、胡総書記から中曽根首相へ日中友好を推進していきましようと話があった。その第一弾として、中国政府が日本から3000人の若者を中国に招待し、中国の若者と友達になり、将来その人たちが日中友好を推進していくという長期的な提案がされた。それからさまざまな準備を経て3年後、1週間の日程で3000人の日本人が中国を訪問し、そのうち800人が南京へ。ところが、800人の日本人を相手にする通訳が南京にはいなかった。ちょうどそのとき柯隆氏は大学進学の前だった。英文科を目指して受験し、大学から手紙が届く。開けてみると合格と書いてあるが、専攻の欄には日本語学科と書かれていた。どういうことかわからないまま入学すると、3年後、南京に800人の日本人の若者が訪問するため、日本語通訳として養成すると大学から言われた。彼の希望も何も関係なく、もうそれに従うしかなかったという。これが柯隆氏と日本語との出会いだった。最初は全くわからないながらも一生懸命学び、3年間で日本語通訳レベルまでマスター。卒業後は通訳として地方公務員になったが、南京に日本人がいないため仕事はなく、しばらくは遊んでいたという。ところがある日のこと、次の運命と遭遇した。名古屋市と南京市で姉妹友好都市提携が結ばれたのだ。

「名古屋から多くの代表団などが南京市を訪れ、僕も通訳をさせていただきました。そこで日本に留学するきっかけができました」。

留学し学ぶ覚悟とは どういうものなのか

南京で知り合った名古屋のロータリークラブの経営者が、柯隆氏の身元引受保証人になってくれることとなり、名古屋への留学を決意した。ただ当時は、ひとりの若者が自分の都合で海外留学するのは、特に南京では聞いたことがなかった。

「君は何しに日本に行くんだとか聞かれてパスポートがなかなか取れませんでした。普通なら3週間ぐらいのところ半年かかりました」。

かしい思い出である。

「できたての三好キャンパスで、私にとってすごく良かったのは立派な図書館があったことです。日本全国探してもなかなかない中国に関係するとても古い本もいろいろあり、何か運命を感じました」。

柯隆氏は日本で生活する上で、留学生と付き合うより日本人と付き合うということを意識した。それは日本語をマスターするために必要なことだと感じていたからである。

「それぐらいしないと言葉は習得できません。ホームシックはほとんどなかったですね」。強い覚悟が垣間見えるエピソードである。



当時の愛知大学みよしキャンパスと図書館

3年生の時、奥野先生の近代経済学の金融論を学んだ。この授業が、柯隆氏の将来を決定づける大きな出会いとなった。1年間の授業が終了し先生から言われた言葉は思いもかけないものだった。

「先生に『あなたが私から学ぶものはもうない』と言われ、さらに勉強したければ名古屋大学の千田先生に推薦状も書け、実はすでに電話もしてくれていました。そして受験のために必要な本を何冊も紹介いただき、それから車道の図書館で開館から閉館まで毎日勉強しました。それが良かった。ここにもひとつの運命があったということです」。その後、名古屋大学で修士を取ると、勉強もよくできているし、博士号を取るなら取れると思うと先生から太鼓判を押された。その言葉を受けて柯隆氏が博士号の後どうなるのかを聞くと、大学に残るしか道はないと言われた。当時の日本の会社では、経済学の博士号を持っている人は採用していなかったのだ。

「そうであれば博士課程に入らず、修士を終えたらシンクタンクに行きたいと伝えました」。実は大学院に入った時から、社会に近く、しかし普通の営利会社ではなく研究もできるシンクタンクで働き、マーケットに近いエコノミストになりたいと考えていた。

「日本にきた当初は、ただ経済学を日本で勉強しようと思っていましたが、経済学を学んだ後どうするかというのは、金融論を学んだ時にひらめきました。生きている経済に携わりたいと思い、エコノミストという選択が描けたということです。人間は何かをきっかけにぱっと道が開けるんですね」。

描いた夢が、努力によって着実に形になっていった。

愛知大学の4年間は、柯隆氏にとってどんな時間だったのか？

「日本という社会を理解するための最も重要な4年間だった」。

それは後になって感じたことだった。大学で学んだ経験があるかないかによって、その後の道は全く異なると彼は実感していた。そして、大学に通ってなければ日本の社会に溶け込むのは難しいとまで感じていた。

「日本人がどう考え行動するかという日本人の行動原理は、日本人の学生との4年間があるからわかるんです。ですから日本人の学生が海外に行く場合も、極力大学へ留学した方がいいと思います。語学留学だけじゃ駄目なんです」。

35年以上日本で暮らしきたからこそ行き着いた、ひとつの考え方である。

人生における愛知大学 という存在

愛知大学は、開学以来中国と関係の深さがひとつの特色となっている。

「これだけ中国との関係が深い大学ですから、やはりそれをひとつの資源として生かしていく努力が重要ではないでしょうか。私は大学というのは半分が教育、半分がシンクタンク機能だと思っています。たとえば1989年に天安門事件が起きた時、愛大の何人もの先生が、もう毎日テレビに出て解説していました。こういったことはやはりとても重要なことだと思います」。

柯隆氏らしい視点であり、興味深いヒントではないだろうか。

柯隆氏にとって、愛知大学は人生の大きな転換点となった。彼にとって、中国での24年間は、真っ暗で先が見通せず、いろいろ探ってもこの先どうなるかまったくわからない日々だった。しかしただ1回のチャンスで、名古屋のロータリークラブの経営者と仲良くなり留学することができた。「一生で何回もチャンスは来るものではない」といつも意識してきたからこそ掴むことができたのかもしれない。

実はもう1年待って名古屋大学を受験するという選択もあったという。「私は80年の人生で、20代の1年は他の年代の10年より長く重要なんじゃないか」と思い、柯隆氏は1年待つことを選択しなかった。愛知大学の広告を見た瞬間これだと決めて受験し、入学したことを後悔したことは一度もないという。それは中国で暮らしている時、英語を勉強したくてもお前は日本語科だと言われて従うしかなかったよう

に、自分の運命を自分で決めることができなかった苦い思い出が今も強く刻まれ、同時に自分で決めることへの喜びや責任を感じているからである。



これからも、自分の運命は 自分で決めていく

「私は日本に来て『自分の運命は、自分で決める』という言葉と出会い、その言葉が一番好きです。日本に来てからは、全部自分で決めています。自分の人生だから自分で進んで、努力すればいいんです。これは愛大に入ってから今までずっとそう思ってきました」。

この強い思いを知ると、現在の活躍している姿は必然のことなのかもしれない。

そして今後については「できることなら日本に少しでも恩返しをしたいと思っています。まさに今の仕事である政策提言を通して、みんなが理解を深めることで、正しい日中関係構築に貢献できれば」という夢を描いている。

柯隆氏の語る日中のさまざまな問題への提言が果たす大いなる可能性に、期待は膨らむばかりである。



愛知大学理事長兼学長広瀬祐樹氏と柯隆氏

AERSの一年

(アース)

明日の地域社会に貢献する人材を育成する

愛知大学教育研究支援財団(愛称^{アース}AERS)の一年を振り返りました。

「^{アース}AERSとは:AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION(愛知大学教育研究支援財団)の頭文字を合わせた愛称です。^{アース}AERSは、より良い明日(アース)に向かおうという思いも込められています。」



教育活動の支援

ハーバード大学アジアセンター所長 ジェームズ・ロブソン教授をお迎えして

ー国際研究機構主催「第4回研究フォーラム」の開催ー

愛知大学国際研究機構(以下、「機構」と表記)とは、国際分野の研究活動を行っている愛知大学の6つの研究機関から構成される一種のアンブレラ組織です。6つとは、国際問題研究所、中日大辞典編纂所、現代中国学会、国際コミュニケーション学会、国際中国学研究センター(ICCS)、そして国際ビジネスセンターです(設立年月順)。大学の第5次基本構想において、6構成機関の共同取組が推奨されていることを背景に、この間、機構主催の「研究フォーラム」を定期的に開催しており、第4回となる今回は、会場を名古屋校舎のグローバルコンベンションホールにおいて2023年7月1日午前に、対面とオンラインのハイブリッド形式による公開講演会として開催されました。

講師としてお招きしたのは、ハーバード大学アジアセンター所長のジェームズ・ロブソン(James Robson)教授です。折しも、同教授は、学生を引率して日本に滞在中であり、超ご多忙なスケジュールの

2022・23年度
愛知大学国際研究機構長
佐藤 元彦



合間を縫ってのご講演でした。ご講演のテーマは「ハーバード大学のアジア研究」であり、時間的には約45分とコンパクトなものでしたが、その内容は、まさに壮大な「絵巻物語」でした。ご存じの方が多いと思いますが、当該アジアセンターは、四半世紀前(1998年)にかの故エズラ・ヴォーゲル教授を初代の所長にお迎えしてスタートしました。とはいえ、そこに至る歴史は実に重厚であり、「エズラ・ヴォーゲルの前後」と付されたご講演のサブタイトルの「前」は実に1871年に遡るものでした。また、ヴォーゲル教授の類まれな業績以外にも、ハーバードのアジア研究の奥深さと言いますか、そのスケールの大きさと言いますか、適切な形容の言葉がすぐには見つからない内容に、次から次へと圧倒されっぱなしでした。ご講演の最後には、東南アジア研究の一層の拡充を含む新たな展開に言及されましたが、部署等を越えたそのエネルギー結集力も圧倒的なものでした。まだ描かれていない「絵巻物語」の先のスペースは、すぐにでも埋まるような勢いを感じた次第です。筆者の力不足と紙幅の関係で、今後を含めた「絵巻物語」の全体は、全くをもってお伝えできませんが、その記録を基にしたペーパーを、ICCSの電子定期刊行物(『現代中国学ジャーナル』)に掲載すべく、準備が進められているところです。

今回の企画は、同日午後に同会場と同じようにハイブリッド開催されたICCS主催の「第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」とのいわばツイン企画でした。そして、このツイン企画を、準備段階から一貫してリードしたのは、李春利教授(ICCS所長、2024・25年度国際研究機構長)であったことをここに銘記しておきたいと思います。最後になりますが、本企画を特に経費面でご支援いただきました愛知大学教育研究支援財団に対しまして、この場をお借りして心から御礼申し上げます。





海外活動の支援

中国語海外短期研修(台湾)を実施して

現代中国学部長
砂山 幸雄

現代中国学部では、2023年3月と8月、学部学生を対象に台湾の三つの協定校、台湾師範大学、東呉大学、および輔仁大学で三週間の中国語研修を実施しました。海外での短期語学研修は今の日本の大学ではごくありふれた取組です。しかし、この台湾での研修は私たちの現代中国学部にとっては特別の意味を持っていました。

コロナ禍は大学教育に様々な影響を及ぼしましたが、「現地主義教育」の看板を掲げてきた現代中国学部にとってはとりわけ大きな試練となりました。海外でのフィールドワークもインターンシップもすべてオンラインでの実施となる中で、現地プログラム(二年生の全員留学プログラム)までもオンラインで行う決断をせざるを得なかったのは、断腸の思いといっても過言ではありません。現地プログラムがあるから現代中国学部を選んだという学生は多く、そうした学生にとって一度も海外経験のないまま卒業する無念さは察するに余りあります。実際に、2019、2020、2021年度の入学者のなかで留学を経験できた学生はごく一部に過ぎません。たとえ短期ではあっても卒業前に一度は中国語圏に留学する機会を提供したいという思いから企画したのが、この短期語学研修でした。当時、中国の大学はまだ留学生を受け入れておらず、台湾の大学もようやく門戸を開き始めたばかりで、防疫対策としてフライトにも、入国後の行動にも制限が課されていました。このような事情により、これは特別な短期研修だった次第です。

もっとも、二期にわけて実施された研修に参加した学生の総数は三十数名と多くはありませんでした。参加費用の問題もありましたが、最も大きく作用したのは、コロナ禍の中で海外渡航そのものを敬遠する雰囲気が醸成されていたことではなかったでしょうか。そのような中でも研修参加を決意した学生の熱い思いと、それを支えてくださった保護者の皆様のご理解に敬意を表したいと思います。短い期間ではあっても、そこで得た体験がグローバルな視野を持つ人材として成長するための貴重な財産になることを願ってやみません。このように、特別な意義を持っていた本研修に対する愛知大学教育研究支援財団のご支援に感謝申し上げます。



中国語海外短期語学研修(台湾)に参加して

現代中国学部4年(2023年度時)
宗長 結香

私は高校生の時に修学旅行で台湾へ行き、そこでの経験から中華圏の知識をもっと増やしたいと思うようになりました。そして2年次に全員が留学へ行ける現地プログラムに魅力を感じて、愛知大学現代中国学部に入學しました。しかし、新型コロナウイルスの影響によってオンライン留学へ変更となり、大学生活で最も楽しみにしていた行事がこのような形で叶わなくなり、とてもやるせない気持ちになりました。その後は、HSKや中国語検定の資格取得に加えて、さくら21プロジェクト(中国や台湾の大学生とのオンライン交流)、江蘇杯中国語スピーチコンテストへの参加など、日本に居ながらもできる限り中国語に触れられるような環境を作りながら生活してきました。

大学4年次の春に、夏季休暇期間を使って現地プログラムの代替となる中国語海外短期語学研修に参加できるという案内がありました。当時はまだ就職活動が終わっていませんでしたが、「これがラストチャンスになる」「この機会を逃したら後悔する」という思いから参加を決意しました。現地では教科書を使った中国語の授業だけでなく、コンビニやスタバでのドリンク注文の表現、各SNSの専門用語や会話文など実用的な中国語まで勉強しました。さらに文化クラスでは、故宮博物館の訪問、宜蘭の有名な三星ネギの収穫やネギパイ作り体験、そしてパイナップルケーキ作り体験をすることで台湾文化について更に理解を深めました。今回の語学研修を通して台湾の人々だけでなく、宿舎に暮らす様々な国籍の人と交流を深めました。今後日本にはもっと外国人が増えて、異なる背景を持つ人々と関わっていく機会が増えると思います。異なる文化を持つ人と関わることを恐れずに色々な国の文化を理解し受け入れることで自分の知見を深めていきたいです。





教育活動の支援

■ 平泉フィールドスタディを実施して

経済学部教授
田端 克至

はじめに、2023年に行われた愛知大学平泉フィールドスタディへのご支援に心から感謝申し上げます。この場を借りて、参加学生（28名）たちにとって貴重な学びの機会を提供してくださったことへの深い謝意を表します。

新型コロナウイルス感染症の影響は多方面に及びましたが、中でも学生たちの心理や行動に変化が見られたとの声があります。この変化に対応し、新たな学習環境を模索する一環として、経済学部の教員4名（竹内、小林、打田、田端）は、「平泉フィールドスタディ」というプロジェクトを立ち上げました。また、この取り組みは、愛知大学の学長裁量経費の支援を受けております。

当初、地域貢献の形としてボランティア活動を検討しましたが、訪れた平泉では、自然環境が既に整備され、美しい状態を保っており、むしろ、地域の方々は、外から来る若者たちの声を聞くことを望んでいるとのこと。高齢化が進む中で、若い世代の関心事や価値観を知る、地域にとって非常に貴重な機会でもあるわけです。

こうした事情を説明した所、学生たちから現代のコミュニケーション手段である「Instagram」の活用という提案を受けました。この取り組みは予想以上の成功を収め、一つの投稿が12,900件という驚異的なアクセス数を記録し、学生たちがいかに大きな影響力を持っているか、改めて認識した次第です。

このプロジェクトを通じて、学生たちは新たな自己発見を果たし、また、地域社会との有意義な交流を経験したと感じております。

私たち教員にとっても、学生たちの可能性と、教育の場が持つ新たな可能性を改めて認識する機会ともなりました。

最後に、このプロジェクトを支えてくださった愛知県のフタバ産業、地元企業の翁知屋社長・佐々木氏、そして青木幸保町長、高橋拓生町議会議長はじめ平泉の皆様へ改めて深く感謝申し上げます。貴重な経験を通じて得た学びは、参加した学生たちの将来に大きな影響を与えると期待しております。今後も、このような実践的な学習機会を提供し続けることができるよう、引き続きのご支援を賜りますようお願い申し上げます。



■ 「異界」を考える ～比較民俗学会 2023 年度大会報告～

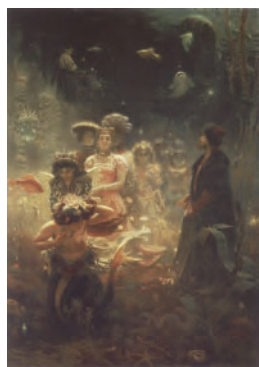
経済学部准教授
清水 伸子

2023年10月7日と8日の二日間にわたって、愛知大学教育研究支援財団のご支援を受け、愛知大学国際コミュニケーション学会と共催で比較民俗学会2023年度大会を開催することができました。今回は大会テーマとして「異界」を取り上げ、ヨーロッパやアジアの伝説の「異界」の紹介や、「異界」に関する研究の情報交換も行うことができ、大変充実した大会となりました。

今大会テーマの「異界」は大変時節に合ったものでした。というのも、最近、日本では「異界」が流行しているからです。このため、大会には現役学生や国内外からの参加者もいました。

現在、日本のライトノベルやアニメでは、「異世界転生」モノや「異世界召喚」モノと呼ばれる多くの作品が発表されています。2023年8月にはNHKが「異世界スペシャル」と銘打った番組を3回放送したことからも、この「異世界」モノの流行り具合が分かります。

「異界」とは「この世」つまり「私たちの世界」以外の世界と言い換えることができます。古来より、日本人にとっての「異界」は、ただ一つではなく、また、概して恐怖や畏怖の念を抱く対象でした。死後の世界を指す「あの世」や『百鬼夜行』または各地で語り継がれてきた民話や伝説を思い浮かべれば、それは明らかです。そして『古事記』や「土蜘蛛」や「桃太郎」のお話からも分かるように、主人公は多くの場合、異界



に赴き、異界に属する存在を打ち負かし、必ず「もとの世界」つまり「私たちの世界」に戻ってくるお話です。

しかし「異世界」モノは全く違います。主人公たちは「私たちの世界」に戻ってくることはありません。それどころか彼らは戻ってきたいと思わないのです。「異世界」モノは、「私たちの世界」から別の世界へ転生したり召喚されて始まるお話です。ですから「異世界」も「異界」の一つですが、ここではもはや「異界」は恐怖や畏怖の念を抱く対象ではないのです。

この「異世界」モノが、シンデレラに代表される「継子いじめ」のお話のように、いつの時代にも、またどの文化圏でも見られる文芸ジャンルとなっていくのかどうかはまだ分かりません。キリスト教文化圏では転生というモチーフは受け入れられない可能性があるからです。しかし、メタバースやVRが私たちの生活に浸透していく将来を考えれば、「異世界」モノのお話は今後も生み出され続け、それに従って私たちの異界観もさらに変化していくのかもしれない。

「海底王国のサトコ」(1876) イリヤ・レーピン画*

ウクライナやロシアで広く知られている英雄伝説「サトコ」から、主人公サトコが竜宮城に行った場面を創作したもの。*Илья Репин, Аврора, 1996, СПб, стр.77.



教育活動の支援

「奨学金」授与式

2023年12月2日
愛知大学名古屋キャンパスで実施

2023年度は名古屋キャンパスのグローバルコンベンションホールにおいて奨学金授与式を開催しました。勉学意欲が高く、日々頑張っている学生に経済的支援を行い、より一層充実した学生生活を送るとともに希望ある未来を目指してもらうことを願い、6分野の合計84名の学生に奨学金を給付しました。式では、加藤満憲理事長、八木好郎同窓会会長、武山卓史後援会会長から、挨拶と賞状の授与、広瀬裕樹学長から激励の言葉をいただきました。また、受賞した学生を代表して、各分野の3名から感謝の言葉や抱負が語られました。



奨学金給付実績

一般給付奨学金 48名 法科大学院特別奨学金 3名 法科大学院入学時給付奨学金 1名 同窓会「知を愛する奨学金」3名
後援会学業奨励金 22名 後援会私費外国人留学生給付奨学金 7名

法科大学院特別奨学生

法科大学院3年(2023年度時)
式井 悠

愛知大学法科大学院3年生の式井悠と申します。本日は、このような場でご挨拶させていただく機会を与えていただき、ありがとうございます。

私は、弁護士を志して、愛知大学法学部に入学し、司法コースを修了した後、愛知大学法科大学院へ進学しました。

私が幼い頃は、私の祖父や母が教員をしていたこともあり、教員となることを目指していました。

しかし、あるとき、教育現場において発覚する虐待や、いじめ問題といった様々な問題の解決のためには、問題解決のために尽力する教師もさることながら、教育現場において活躍する法律知識を持った専門家の力が必要とされていると知りました。そこで、私は、祖父や母とは異なり、弁護士という形で教育現場に携わっていきたいと考えるに至りました。また、他人との会話の中で、悩みを打ち明けられたり、相談に乗ったりしているうちに、それらの問題を自分で最後まで解決できる人間になりたいと感じたため、弁護士になれば、教育問題のみでなく、私人間で発生する紛争を、当事者が最も納得する形で解決するために尽力することができると考えました。これらの理由から、私は弁護士を志すに至りました。

学部時代は、弁護士として活動するためには、コミュニケーション能力が求められていると考え、法律の勉強もそこそこに、コメダ珈琲店のアルバイトを中心に、接客業のアルバイトによってコミュニケーション能力を磨く日々でした。当時は、アルバイトを掛け持ちし、1日最大12時間働いていたこともあり、体力には自信をもって、法科大学院へと進学しました。しかし、法科大学院での生活は、学部時代とは異なり、思った以上に過酷でした。私は三重県の子日市市から通学しているのですが、睡眠のために家に行き、学校に帰ると表現するのがふさわしいくらいに、自宅に居る時間が少ない日々を送っています。このような生活を送るに至ったのには、きっかけとなった言葉があります。それは、「死因が勉強のしすぎという人はいない。」というものです。この言葉を聞いて、確かに、勉強のしすぎで亡くなった人は、少なくとも私の周りには存在しませんし、それで長年の目標である司法試験合格をかなえられるのであれば、限界まで勉強し続けるべきだと感じたのです。この言葉を胸に、司法試験までの3年と半年間を走り抜けると決めたので、残り約半年を、全力で走り抜け、司法試験合格という目標を達成できるように頑張ります。

もともと、これまで、いかに自分が頑張っているか、というお話をさせていただいた訳ですが、私が勉強だけに専念することを許されていること、頑張り続けていられるのは、周りの人の支えがあるからです。ローカル線の終電後に帰宅する私のために、四日市駅まで深夜の送迎にかり出され、翌日は6時半という早朝に家を出発させられるという過酷な生活を送っている両親、多忙であるにも関わらず、私の疑問について丁寧に対応してくださる法科大学院の先生方、気晴らしがしたいといって突然呼び出される友人、周りの環境に恵まれているからこそ、私は今の生活を続けられています。また、私が弁護士を目指していると聞くと、頑張ってね、期待していると優しく声を掛けてくれる人もたくさんいます。勉強が嫌になる日も確かにありますが、応援してくれている人、支えてくれている人がいるから、気持ちを切り替えて頑張り続けられます。

私の周りの人たちは、真に私が弁護士となることを、期待してくれていると思うので、その期待に応えるためにも、司法試験に合格しなければなりません。そして、司法試験に合格し、弁護士となった後は、教育現場で発生する問題や私人間の紛争について当事者に寄り添った解決を目指して尽力していく弁護士になりたいです。

御清聴いただき、ありがとうございました。





教育活動の支援

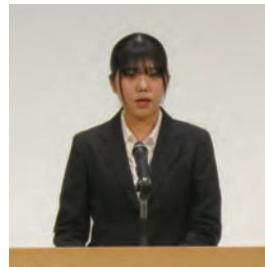
■ 同窓会「知を愛する奨学生」

現代中国学部1年(2023年度時)
小嵜 弥々

この度は「知を愛する奨学生」に採用して頂きありがとうございます。私は毎日片道約2時間をかけ通学しており、アルバイトをする時間が少ないため、日々の通学の負担を少しでも減らすために奨学金制度を受けさせていただいています。

私は現代中国学部で中国語を勉強しており、2年次の春学期は天津に留学をしています。日本と同じアジア圏でも、違った魅力があり、毎日興味深い発見が沢山ある中過ごしています。

中国と聞くと政治上日本とあまり友好的なイメージはありませんが、実際訪れてみると街の方々はとても親切な人ばかりでした。分からないことは実際に聞いたり、見たりして、勝手なイメージと偏見だけで決めつけてはいけなと感じました。このような貴重な体験を通して、まずは資格取得を第一の目標に頑張っていきたいと思っています。



■ 後援会私費外国人留学生給付奨学生

経営学部4年(2023年度時)
SHIN JEONGWON

この度は、愛知大学教育研究支援財団「後援会私費外国人留学生給付奨学金」に採用いただき、誠にありがとうございます。

私が愛知大学に入学したのは2020年の春でした。合格の結果が出た日から自分がやりたい勉強をしたり、たくさんの日本人の友人を作ったりなど充実した素敵な大学生活をこの愛知大学で送ることをとても期待しておりました。しかし、新型コロナウイルスの影響で1年次・2年次の2年間は愛知大学への通学はおろか、日本への入国さえかなわない状況でした。自分がイメージした大学生活はこのようなものではないと思い、落ち込んだ時期もありました。

しかし、このような状況は「今」だからこそ経験できる貴重な機会なので、この環境をプラスに変える努力をしよう、と思いました。その転換点であったのが「専門演習」通称「ゼミ」でした。大学生になって2年間一生懸命努力したと言えることがなかった私は、充実したゼミ活動することで有名なゼミに入りました。入国してからほぼ毎日大学に行ってゼミ活動をする事でゼミのメンバーは『友人』の枠を超えて『家族』になり、私の大切な居場所となりました。

ゼミでプレゼンテーション大会に出場したり、学祭やオープンキャンパスなどのイベントに参加したりしたことにより、ここの人々と一緒にいたい、ここの人々に貢献したいという気持ちが徐々に大きくなりました。そのため、日本での就職を決め、愛知大学を卒業した後もこの日本、名古屋での生活を続けることになりました。

就職先が決まり、卒業に向けて日々を過ごしている現在、自分の留学生生活を振り返ってみると、時には辛かったり、自分の思い通りに進まなかったりすることもありましたが、日本に来てからの1年半は毎日が楽しかったです。こう言えるのはいつも自分を支えてくれた人々のおかげだと心から思っています。このような絆にめぐりあわせてくださった愛知大学に感謝しております。この感謝の気持ちを伝えるためにもより頑張りたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

残り少ない大学生活も後悔のないように一生懸命楽しみたいです。そして愛知大学の卒業生として、これからも縁を大切に、さまざまな場面で活躍できるよう頑張ります。

最後にご支援いただいている全ての方に重ねてお礼申し上げます。



■ 「感謝状」贈呈と感謝の集い

2023年12月2日
愛知大学名古屋キャンパスで実施

当財団は、発足以来、同窓会及び後援会からの寄付に加え、企業や個人会員の皆様からの寄付を始めとするさまざまな形でののお力添えにより事業を実施しており、お陰様にて順調に教育研究支援を進めて参ることができ、心からお礼を申し上げます。

ご寄付を頂いている会員の皆様に、奨学金給付を受けた学生の抱負等を直接お届けしたいとの思いから、奨学金授与式にご招待し、その後引き続いて名古屋校舎研究棟20階M2001教室において、多くのご寄付をいただいた方へ感謝状を贈呈し、感謝の集いを開催しました。今年度は奨学金給付の学生代表にも参加してもらい、学生生活や希望する進路の話とともに会員との意見交換も行われ、これまでに増して活性化した会となりました。



【感謝状贈呈】 (法人)株式会社共立メンテナンス様 (個人)土井 義昭様、吉井 忠様



教育活動の支援

「奨励賞」授与式

2024年3月2日
愛知大学車道キャンパスで実施

社会・文化・学術・芸術・スポーツ・社会貢献などの分野において活躍し、成果をおさめた個人及び団体に対し、その栄誉を称え、一層の励みとすることを目的に車道キャンパスのコンベンションホールにおいて顕彰を実施しました。



【後援会奨励賞】 ●スポーツの部(団体) ・優秀奨励賞:4団体 ・奨励賞:9団体
●スポーツの部(個人) ・最優秀奨励賞:2名(柔道部・深井大雅氏、水泳部・笠原大和氏) ・優秀奨励賞:14名 ・奨励賞:42名
●マネージャーの部 ・奨励賞:1名(サッカー部・片岡穂乃華氏) ●学術文化の部(団体) ・優秀奨励賞:1団体(軽音楽部) ・奨励賞:1団体
【同窓会奨励賞】 ●(個人) ・優秀賞:伊藤紫織氏、西澤伸悟氏、福田真子氏、生田大地氏 ・功労賞:古澤真世氏、阿部亮平氏
●(団体) ・優秀賞:為廣ゼミナール「おにぎり専門店」 ・功労賞:為廣ゼミナール「なんとかなる入門」、Ai-CONNEX事業「愛大米」プロジェクト
【クラブ愛知賞(社会貢献の部)】 ●(団体) 愛大ささしまエリマネ委員会
【同窓会資格試験合格者】 ●(司法試験) 小池亜也加氏、伊藤大介氏 ●(公認会計士) 荻谷征朋氏、花田佳都氏
●(国家公務員総合職) 長谷川新太氏、林光輝氏、杉山未紗氏、伊藤美紅氏 ●(税理士試験) 川瀬智弘氏

「最優秀奨励賞」の受賞を受けて

経営学部4年(2023年度時)
深井 大雅

この度は「後援会最優秀奨励賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。愛知大学柔道部で過ごした4年を振り返ると、悔しさの残る場面も多々ありましたが、監督やコーチ、チームメイトをはじめとする多くの方々に支えられ、最後までやり通すことができて本当に良かったと思っています。

入学した当初は、コロナ禍で思うように稽古を積むことができず、悪戦苦闘の毎日を過ごしてきました。日を追うごとに自信が失われていき、試合でも結果を残すことができず、精神的にもかなり辛い状態にあったことを、今でも昨日の事のように思い出します。しかし、このような厳しい状況下においても、ほんの少しでも前に進むために、絶えず紙一枚の努力を積み重ねてきました。こうした努力が実を結び、昨年2月に奈良県天理市で行われた全日本学生柔道Winter Challenge Tournament 2023において、100kg超級で準優勝という成績を収めることができました。本大会は、東海大学や国士舘大学、天理大学といった全国各地の強豪大学が名を連ねており、予選なしのオープン参加であることから参加人数が他の試合と比べてかなり多いことで知られています。この大会での入賞を機に、コロナ禍で失われた自信を取り戻すことができ、社会人でも柔道を競技者として続けていくことを決断しました。自分のこれからの成長を信じ、さらなる高みを目指していきたいと思います。こうして4年を振り返ると、柔道を続けてきてよかったと感じると同時に、ここまで成長させてくれた環境、支えてくれた人たちに対する感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。これからも、自分の目標に向かってより一層努力を重ねて参りますので、ご声援のほどよろしくお願い致します。この度は、本当にありがとうございました。



一泳入魂

文学部1年(2023年度時)
笠原 大知

この度は「最優秀奨励賞」を授与頂き誠にありがとうございます。このような素晴らしい賞を頂くことができ大変光栄です。ご支援くださった全ての皆様に深く感謝いたします。

私は、夏季は豊橋校舎の屋外プールで練習をしています。水面に浮かぶ落ち葉やゴミ、また温水プールではないため凍えるような冷たい水温の中で練習をしています。冬季は名古屋校舎から約30分離れたプールで練習をしています。一般の方も利用する公共プールのため練習ができるのはごくわずかな時間に制限されています。恵まれた練習環境とは言い難いかもしれません。しかし、限られた環境の中でも本番で最大限にパフォーマンスを発揮するため、練習メニューやトレーニングを工夫し、見つめ直しながら試行錯誤を繰り返す1年でした。入学前の自分の実績やコンディションと比較してしまい、どうしてもネガティブになってしまう時期もありましたが、周りの方々のサポートのおかげで多くの大会に出場し、入賞できたことが自信となりもう一度自分を奮い立たせることができたと感じています。世界選手権の日本代表を选考する大会「ジャパンオープン2023」にも出場し、自己ベストまでは程遠く満足な泳ぎはできなかったものの、大舞台で愛知大学を代表してレースをすることは誇らしいことだと思っています。そして、私が常に目指しているのは、国内最高峰の大会である「日本選手権」に出場し、そこで戦うことです。今年度は惜しくも0.4秒届かず、昨年度に続き連続出場とはなりませんでした。その0.4秒の壁を壊せるような質の高い練習を積み重ねていこうと、強く前向きな気持ちでいます。自分が活躍し、結果を残すことで水泳部がさらに活気づいていくことが今の私の1番の願いです。文武両道を目標に今後も精一杯精進して参りますので、水泳部へのより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。この度は本当にありがとうございました。





教育活動の支援

サッカー部のマネージャーとして

地域政策学部4年(2023年度時)
片岡 穂乃華

この度は、「奨励賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。このような賞をいただけて大変嬉しく思います。

私はサッカー部のマネージャーとして活動し、練習時のサポートや書類の作成・提出といった事務的な仕事を中心に行っていました。入部した当初は練習時や試合時に主体的に動くことができず、迷惑になってしまっていることや、選手やチームの役に立てていないことに悩む時期もありましたが、徐々に自分が選手だったらマネージャーにどうして欲しいのか、選手が練習に集中できる環境をどうやったら生み出せるのかを考えて行動できるようになりました。選手からの「ありがとう」が私の原動力になりました。



私は元々サッカーを観るのが好きでより深くサッカーと関わりたいという理由で入部しました。マネージャーをするのは初めてだったので不安もありましたが、毎日のようにサッカーと接することができるのは楽しく、大学4年間があっという間に過ぎていきました。今までの活動を振り返ってみて、多少なりとも選手やチームの力になれたこと、選手と一緒に同じ目標に向かって試行錯誤しながら部活ができたこと、選手が日々成長していく姿を近くで見られたことはマネージャーをやっていて良かったことだと感じています。

サッカー部のマネージャーとして、数えきれないほど多くの貴重な経験をさせていただきました。これから社会人になりますが、大学生活で経験したことを活かして人の役に立てるような社会人になりたいと思います。また、「奨励賞」を授与していただいたことを励みに新社会人として4月から頑張っていきます。

最後になりますが、関わってくださったすべての方々に心より感謝を申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

MOS世界学生大会への挑戦

経営学部4年(2023年度時)
福田 真子

このたびは同窓会奨励賞 優秀賞を授与いただきまして、誠にありがとうございます。

MOS(Microsoft Office Specialist)とはExcelやWordといったマイクロソフトオフィス製品の知識・操作スキルを証明する資格試験であり、このMOS世界学生大会は試験に合格した学生がエントリーすることができます。私はMOSのExcel試験の直前、試験画面に表示された大会の案内を見て、自分の力を試してみたいと興味を持ちました。Excel合格後はWordの受験も考えていたため、その際は世界大会を意識して勉強に励みました。ただ合格点に達するだけでは入賞は難しいため、練習では本来の制限時間よりも短い時間を自ら設定して正確かつすばやく解答することを心掛けたことで、緊張しがちな本番での自信や安心につながりました。



その結果、日本代表選考にて入賞することができ、また、愛知大学からは私が初めての入賞者であったため喜びが増しました。日本代表にはあと一步及びみせんでしたが、入賞という結果はコロナ禍で思うように活動することができなかった大学生活における良い思い出となりました。

私がMOSの勉強を始めた際は大学のレポートでWordを使用する程度のごく普通のレベルでしたが、勉強を通してOffice製品の活用スキルに少し自信を持つことができました。また、日本代表に選出されるとアメリカで行われる決勝戦において世界中の学生たちと競い合い、交流できる貴重な機会を得られるため、ぜひ今後、愛知大学から日本代表が輩出されることを願っています。

さて、楽しかった学生生活もうすぐ終わりを迎え、4月から私は目標であった経理職として働く予定です。愛知大学で学んだ会計の知識、そしてMOSの勉強で身に付けたスキルを存分に発揮し、これからも学ぶことをやめずに、実りある社会人生活を送ってみたいです。

最後になりますが、このような立派な賞をいただけたことは大変光栄であり、今後の励みとなります。改めて関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

その他、知のミーティング、海外研究実習助成、教育活動助成、キャリア教育事業助成金などの事業を実施

講演会開催等への助成、学生が海外を訪問し社会の実情を研究する海外フィールドワークや海外インターンシップ、学生の部活動における各種競技大会へ参加する経費等の助成、学生のキャリア教育支援にかかる事業などを実施しています。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、2020年度から対面での講演会や海外研究実習などが中止を余儀なくされていましたが、2023年当初頃より活動の再開が見られるようになりました。

寄附者名簿

※(順不同・敬称略)

◆法人

愛知大学後援会
愛知大学同窓会
愛知トヨタEAST株式会社
愛知リーガルクリニック法律事務所
株式会社アシスト
株式会社あのおん
宇都宮工業株式会社
株式会社うぼん
NTP名古屋トヨペット株式会社
株式会社えびせんべいの里
株式会社ガード・リサーチ
木村産業有限会社
CANホールディングス株式会社
株式会社共立メンテナンス
近畿日本ツーリスト株式会社
株式会社クイックス
ジャニス工業株式会社
株式会社スウィズ
西濃運輸株式会社
セイユーコンサルタント株式会社
株式会社大学通信
有限会社つボイノリオ商店
デュプロ販売株式会社
税理士法人東海浜松会計事務所
トーテックフロンティア株式会社
トヨタカローラ名古屋株式会社
株式会社ナショナルメンテナンス
株式会社日本一ソフトウェア
日本音楽出版株式会社
株式会社日笠会計
藤岡倉庫株式会社
有限会社フジパッケージ

株式会社フューチャーイン
公益財団法人古川知足会
株式会社ベストライフ
株式会社マルホ
宗次ホール
明治電機工業株式会社
株式会社名大社
ユーティーケー工業株式会社
株式会社Re・lation

◆個人

青野吉伸
足立光則
荒木仁子
有森茂生
石川光男
石澤務
伊藤広済
稲田正俊
岩田喜久
内山隆司
遠藤精基
大江恒晴
岡村幹吉
尾関種雄
加藤孝雄
加藤春雄
加藤満憲
岸田充広
國島芳明
熊谷友佳理
栗原裕
甲村洋子

酒井美代子
佐藤隆子
下和田恵男
庄田元久
菅野隆
菅原宜彦
杉本みさ紀
鈴木孝一
鈴木智
高木守
高間益雄
高野史枝
高橋俊一
竹島良祐
竹島まこと
武田秀則
多田譲
田原茂穂
土井義昭
唐啓山
鳥越剛
中江正弘
中島寛司
中野貴文
那須國宏
西川米子
橋本千洋
橋本正洋
土師幸夫
長谷川勲
長谷川信義
林一義
林貞男

林昇平
林行孝
速水利行
日笠羽司名
樋口裕嗣
久里和英
平井治彦
平松礼二
廣重美和子
福田豊
藤井千恵子
藤井明雄
藤岡勢理
藤田拓也
二村友佳子
堀田正二
堀田久富
堀木ヒロミ
猿爪雅治
松井淳子
松下真由美
松野博美
森繁美
森善徳
八木好郎
安井健治
安井博子
山崎恵子
山田功
山本薫
湯山義則
脇水達生
和田信敏

※その他匿名希望者あり

皆様からお寄せいただいた温かいご支援に心よりお礼申し上げますとともに、今後とも一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

※本財団に寄附した年会費及び寄附金は、法人税・所得税の優遇の対象となります。(詳しくは、税務署へお問い合わせください)

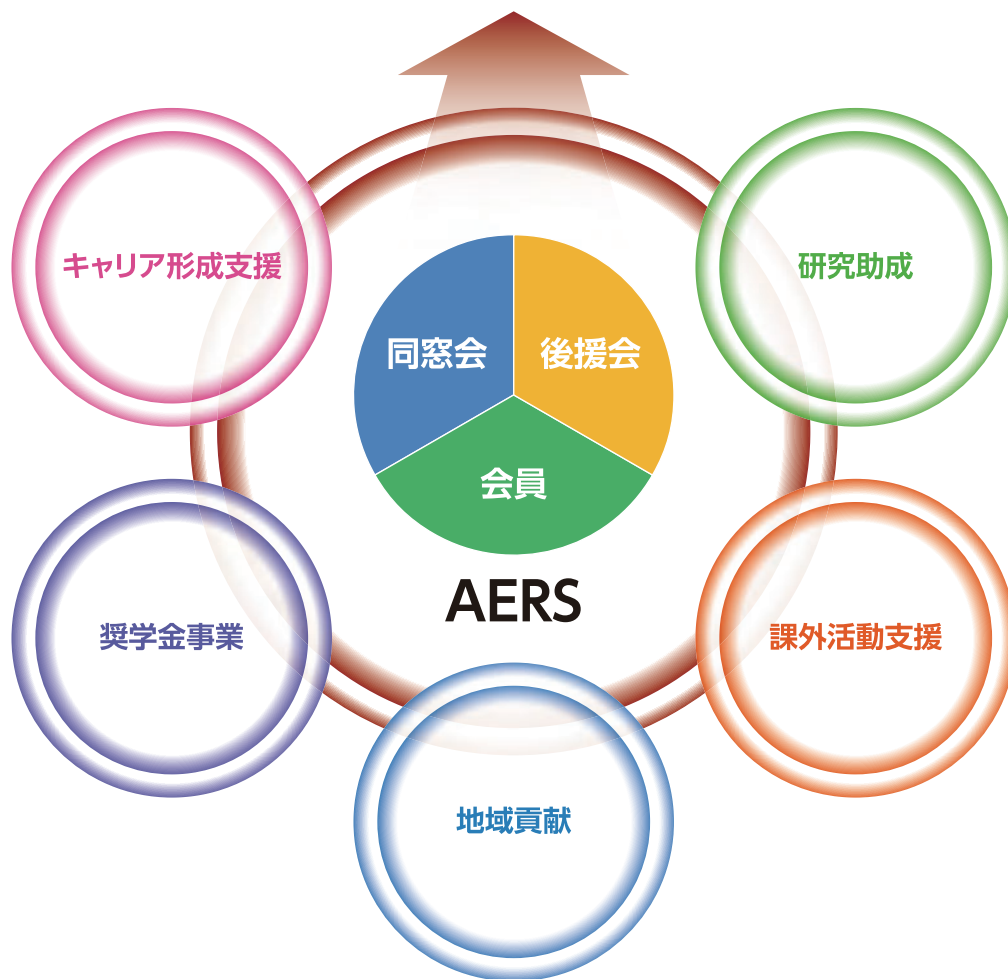
2012年11月、より地域社会に貢献する人材の育成を重視した財団として、公益財団法人「愛知大学教育研究支援財団」を設立いたしました。本財団は、愛知大学における学術研究及び教育活動を支援し、もって広く学術の発展と教育の充実、不特定多数の利益の増進に寄与するための事業を実施しています。ひとりでも多くの研究者や学生、ひとりでも多くの事業に助成が活かされることを願って、幅広く応募の機会を開いています。これらの事業は、同窓会費・後援会費を始め、広く一般企業・個人の皆様の会費・寄附を貴重な原資としております。今後とも活動にご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

■財団の基本情報

名称	公益財団法人愛知大学教育研究支援財団
設立日	1965(昭和40)年9月7日(財団法人 愛知大学同友会)
移行日	2012(平成24)年11月1日
代表者	理事長 加藤満憲
事務局	〒461-8641 名古屋市東区筒井2-10-31
電話番号	(052)937-8156
FAX	(052)937-8157
e-mail	kouyu@aichi-u.ac.jp
ホームページ	http://www.aichi-u.ac.jp/aers

社会で活躍できる優れた人材の育成

愛知大学



知で生きる人へ。

公益財団法人 愛知大学
教育研究支援財団

AICHI UNIVERSITY EDUCATION RESEARCH SUPPORT FOUNDATION